

ルソーの教育論——女性の教育論を中心に

松田幸子

はじめに

ルソー（1712～1778）は『人間不平等起源論』（1755）のなかで、人間を自由、平等、独立的な存在としようとして、人間の改造と社会の改革を主張するために「人々の間における不平等の起源はなんであるか、そしてそれは自然法によって是認されるか」という問題にたいして大胆にいとんだのである。その本でルソーは女性にたいして次のように述べている。

「愛らしく、しとやかな女性市民たちよ、あなたの天職はわれわれ男性を制御することでありましょう。夫婦の結合においてのみ行使されるあなた方の純粋な権力が、ただ国家の光栄と公共の幸福のためにのみ感じられるときはまことに幸せです。……あなた方はいつまでも現在あるとおりに風俗の純潔な守護者、平和のきずなであって下さい。そしてどんな場合でも、義務と美徳のために、どこまでも心情と自然との権利を引き立たせて下さい。」と抽象的な表現をしているだけである。これ以上は女性の独立とか、自由平等については具体的な説明はない。

ルソーが女性について具体的に述べているのは『エミール』（1762）のなかにおいてである。『エミール』は、一人の男性教師がエミールという平凡な少年の結婚までの期間を自然という偉大な教師の指導に従って如何に導いていくかを小説風に書いたものである。その『エミール』の最後の第5編に、エミールの結婚相手となる女性ソフィーの教育についてルソーの考えが述べられているが、この論文では、そこに見られるルソーの女性観を中心に考察してみたいと思う。

第1章 女性の教育

ルソーは女性の教育についてさまざまなことを述べている。たとえば抽象的、理論的な真理の探求などはすべて女性には不適當であり、女性は実用に結びついたことを勉強すればよく、男性の発見した原理などを応用するのが女性にはむいていると言っている。また女性には幼いときから宗教の話をする必要がないとも言っている。なぜ

なら宗教のような問題が理論的に教えられるということは、女性の一生にはあり得ないことであるからである。なぜなら女性の信仰は、父親とか夫の信仰を信じなければならぬのであるから、女性には宗教を好きになることが大事なのだと教育すればよいと、男性と女性の本性を分けて述べている。その理由をはっきりとのべているわけではない。

しかし次のように女性の教育を理路整然と考えて述べているのもあるので、私は以下でその点に着目したい。

ルソーは「男女は性に関係のない点においては同じであるが、性に関係のあるあらゆる点においてはどこを見ても関連があり、どこを見ても相違がある。」と述べている。そして人間として共通な点から見れば、男女は平等であるが、違っている点から見れば男女は比較にならないほど異なっているので、女性の教育は男性とはまったく異なった面を持つべきである。

女性が男性と異なる点は、第一に女性は子供を産むという特別な使命を自然から託されていることである。それ故、女性はその責任を持たねばならないとルソーは規定し、それを基本にして女性の教育を考えている。

そこでルソーは「女性は素行、態度、動作など細心の注意をもって生きることを自然から要請されている。……男女は平等だし、その義務も同じだなどと大ざっぱなことを主張するのはむなしなことである。……男性と女性の依存状態は同等ではない」と言っている。彼によれば、男性は欲望によって女性に依存しているが、女性は欲望と必需品を手に入れるために男性に依存している。ルソーがこのように言うのは、当時（18世紀）は、男性が主として生産と労働に従事していたからである。

女性は必需品を手に入れるためには男性に依存しなければならないと言うルソーは、女性教育にたいしてさらに続けるのである。

女性を教育する場合には、貞淑な女性になれとか、尊敬される価値のある女性になれるというものだけではなく、他人（主として男性）が自分をどのように思うかということまで考える必要がある。そのようなルソーの女性教育論にたいして水田珠枝は、ルソーの女性教育論には男女平等とは全く関係なく、男尊女卑的なことが書かれていると次のように反論している。

「ルソーの課題は、自然状態に存在した自由・平等・独立を、社会状態のなかでどう実現するかであった。ところが、これは男性だけの問題で、女性は生まれながらにして男性に従属すべき存在なのだから、自由も独立も平等も本来無縁なものだとされ

る。『エミール』を見ると女性教育については男性教育とまったく反対のことが要求されている。」

たしかにルソーには水田に批判されるような部分も見られる。たとえば、ルソーは女性は男性に気に入られ、男性に役立ち、男性から愛され尊敬されるような女性になれとか、夫が悪いときでも不平を言わず、堪え忍ぶことを早くから学ばなければならぬといったような女性教育論を述べている。

しかしルソーは女性も自立性を持つ必要があるとも述べているので、第2章ではこのことについても考察する。

第2章 理想的な主婦と女性の自立

ルソーはエミールの結婚相手にソフィーという少女を考える。われわれは彼女の受けた家庭教育の中味からルソーの考える理想的な主婦像を読み取ることができる。

ルソーは、家長を中心とした秩序ある家庭を理想としているので、一見、封建的な家庭を理想的とみなしているようである。しかし家庭のなかの女性の生き方を注意深く観察すれば、別の側面も見ることができる。そこで最初にソフィーの育った環境を眺めてみることにする。

ソフィーの両親は田舎で娘を育てており現在はそれほど豊かではないが親子で品位ある生活をおくるには十分な土地などは持っていた。そして家具や調度品などからは、昔はかなり豊かであったらしいことを想像させるものであった。それというのも、昔父親は金持ちで、母親は身分の高い家の生まれであったのである。

ソフィーの容姿は普通だが、顔だちからはしっかりした人物に育つであろうことが予想された。彼女には、さまざまなすぐれた性格がバランスよくそなわっており、他の女性とは比較にならないほど恵まれた女性であった。彼女の衣装は贅沢なものではないが、自分によく似合ったものを身に付けていた。彼女がもっともよく知っており、何よりも母親から教えられていたことは、主婦になるための仕事であった。裁縫、料理などこまごまとした家庭の仕事であり、召使に代わるほどの能力を持っていた。彼女の母親は、自分の出来ないことは召使にもうまく命令できないという信念を持っていたからである。

ソフィーは特に優れているわけではないが、快よい気性の持ちぬしで、しっかりした女性だった。これらのことは両親やまわりの人々との人間的な交わりから学んだも

のであった。さらにソフィーは両親同様、美德を愛する人であった。また学問はないが、正しい判断が出来る人であった。以上のようなソフィーの育ちから見ると、家長が支配する家庭のなかで家族の一員として、妻として生きる資格が充分にあると考えられる。しかしルソーは両親に娘の結婚に関して次のように言わせている。

「両親が娘の夫を選び、娘には形式的に相談するだけ、というのが普通のしきたりだ。わたしはおたがいのあいだでそれとまったく反対のことをしよう。あなたが選んで、わたしたちが相談をうける、ということにしよう。ソフィー、あなたの権利をもちいなさい。自由に、賢明にもちいなさい。あなたにふさわしい夫はあなたが選んだ人でなければならない。・・・その人に腕があり、品行が正しい人、そして、自分の家族を愛する人ならば、その人の財産はかならず申し分のない財産となるであろう。」

またルソーは、女性には男性のもっている有利な立場を利用する技術があると言っている。例えば自分のできないことを夫にやってもらい、このことによって結果的に男性に服従しながらも男性を支配しているのである。このようなことがなければ、女性は男性の伴侶ではなく、奴隷になってしまうであろうとルソーは言うのである。

したがってルソーの女子教育論には、水田が批判しているように封建的は一面も見られるが、女性にも男性と同様な権利を認めているのである。

第3章 エミールとソフィーの結婚

エミールが将来の結婚相手となるソフィーに初めて出会ったのは、エミールは22歳、ソフィーはまだ18歳になっていなかった。その頃のエミールはすでに精神も肉体も大人になっており、品行方正な好青年であった。そのうえ親が残してくれた財産もあり、何不自由のない身分で、親代わりの先生と二人で暮らしながらその先生について社会勉強をしていた。エミールはソフィーと知り合ってから次第に恋愛感情をもつようになり、やがて結婚したいと思うようになった。先生はいずれ二人を結婚させようと思っていたが、まだその時期ではないとエミールに次のように言った。

「ソフィーは、まだ18歳にもなっていない。あなたはやっと22歳になったばかりだ。そういう年齢は恋愛の時期で、結婚の時期ではない。・・・子供を育てられるようになるために、自分が子供でなくなるまで待つがいい。」

さらに続けて先生は、結婚することで生じる義務についても説明した。

「あなたは家庭を持つことを考えている。それは結構な考えだ。それは人間の義務のひとつだ。けれども結婚するまえに、あなたは次のようなことを知らなければならない。何をして一生を送るつもりか。あなた自身と家族の者のパンを獲得するためにどんな方法をとるつもりか。」

そして彼が一人前の大人になるために旅に出ることを勧め、旅の心得を教えた。

「知識を得るためには国々を巡り歩くだけでは充分ではない。旅のしかたを心得ていなければならない。観察するためには見る目をもっていなければならないし、知りたいと思っている対象の方へその目を向けなければならない。旅行が書物よりももっと教えることが少ないひとがたくさんいる。彼らは考える技術を知らないからだ。書物を読むとき彼らの精神は少なくとも著者によって導かれるのだが、旅行しても彼らは自分で見ることが全然できないからだ。またある者は知ろうとしないからこそ、知ることにはならない。」

このような説明をうけてから、エミールは先生と一緒に2年間ヨーロッパの多くの国を見てまわることになる。

旅の目的は、それぞれの国ではどのような政治が行われているか、人間とは何か、また自分とは何かを考えることであった。ルソーは政治の状態を見るときに注意すべきことを具体的に次のように述べている。

「人口が減少しつつある国ではどこでも、国家は没落に向かっているのである。そしてほかのどの国よりも人口が増加しつつある国は、ほかのどの国よりも貧しい国であつても必ず一番よく統治されている国である。」

またどんな国でも都市と農村では同じようには政治が行われていないので、都市だけを見てその国の政治の状態を知ることはできない。むしろ国を形成しているのは農村であり、国民を形成しているのは農民であるからとルソーは述べている。

先生と一緒にエミールは旅をしながらいくつかの外国語を習得して、ひとまわり大人になってソフィーのもとに帰ってくる。そのあいだ彼は自分のことや、これから何処で暮すかなど考えて、結局ソフィーの待つ田舎で平和な自然のなかでの生活を送ることに決めたのである。先生は二人を結婚させ、結婚生活を始める二人にいろいろと助言を与えた。

「夫婦になってからも恋人同士でいることだ。……紐をあまり堅く結ぼうとすると紐は切れる。結婚の紐にもそれにふさわしい力よりも大きな力をあたえようとすると、そうゆうようなことが起きる。……幸せな恋人であれ。しかしつつしみぶ

かい恋人であれ。」

そのようにして二人は結婚生活を始めるわけであるが、何ヶ月かたって後、こんどはエミールが先生にお願いをした。エミールとソフィーは自分たちにまもなく子供が生まれること、そして自分たちは子供の教師になることを決意したと先生に告げ、この若い二人の教師を助けて欲しいと先生に頼むところで『エミール』は終わっている。

『エミール』は、わが子を自分自身で教育できる親を育てることを予想させる結末で終るのである。

ルソーはエミールとソフィーが結婚生活を始め、まさに親になろうとするところで『エミール』を終わりにするが、その後の二人の生活については、先生への手紙の形式で『エミール』刊行後、数か月たって書き始められた。これは『エミールとソフィー』と題されて、ルソーの死後2年（1780年）たってから出版された。そこにはエミールとソフィーのあいだに息子と娘の誕生したことや、先生が二人のもとを去ったこと、その後の二人の結婚生活が狂いはじめたことなどが書かれている。

「わが家をお見捨てになったことによって、先生は私の全生涯にわたって、私のためにしてくださったあらゆる善よりも、さらに一層の悪さをなされたのです。」とエミールが嘆くほどに次々と二人の家庭に不幸が起こったのである。ソフィーの両親の死、エミールとソフィーの娘の死、それらの不幸にたいするソフィーの嘆き、これらから逃れるためにエミールとソフィーはパリに移り住んだのであるが、それからの二人の関係はおかしくなった。そしてさらにソフィーの浮気と妊娠という不祥事がつづいて起こった。冷たくなった二人の関係を取り戻そうとしたエミールにたいしてソフィーは次のように言った。

「お止め下さい、エミールさま。もはや私はあなたにとって何者でもないのだというところをご承知おきください。別の男があなたさまの褥を汚しました。私は身ごもっております。」

ここにはこれまでの二人の関係とはまったく別の側面が書かれている。『エミールとソフィー』のなかには、エミールが自分の不幸にたいしていかに対処したかということが書かれている。エミールは、自分とソフィーはそれぞれ孤独に生きるのが正しい道であると結論づけたのである。そしてエミールは息子をソフィーに預けて旅に出てさまざまな経験をすることになる。

第4章 徳と幸福

エミールがソフィーと知りあって四ヶ月あまりたってから、二人は結婚を望むようになってきた。そのことをエミールより告げられた先生は、二人が結婚して幸福になるにはまだ早すぎると考え、その前に人間として修行をする必要があるとエミールに忠告し（第3章参照）、そしてまた先生は結婚について次のような考えを話した。

若い恋人同士が結婚したいと思う気持ち（情念）をもつのは当然のことであるが、それだけで結婚しては幸福にはなれない。人が情念をもつのは自由だが、それに支配されてはいけないのだ。許された情念と禁じられた情念を区別して前者に身をゆだね、後者を拒否しようとするのは間違いである。それを支配しているならば、すべての情念はよい情念なのだ。それに屈伏させられてしまうなら、すべての情念は悪い情念だ。真の幸福を望むなら、情念を支配するだけの力を持つ必要がある。情念をもつということは、自然の現象であって人間にはどうしようもないことであるが、しかしその情念をおさえることは、人間にも可能である。そのような情念を支配できるのは、有徳な人だけである。有徳な人とは、自分の愛情を理性に従わせることができる人で、いわば自分自身を支配できる人であると先生はエミールに言い、さらに次のように続ける。

「わが子よ、勇気がなければ幸福は得られない。戦いなしには美德はありえない。徳という言葉は力からきている。その力はあらゆる美德のもとになるものなのだ。美德はその本性からすれば弱い、その意志によって強い存在だけに与えられているのだ。」

先生はここで情念との戦いなしには真の幸福はありえないことを教えている。また次のようなことも教えている。

「幸福に賢明に生きようとするなら、君の心を失われることのない美しさ（美德）にだけ結びつけるがよい。その美德が君に与える条件を君の欲望の限界として美德が命ずることに従って行動すれば、運命がどうあろうとも真の幸福になれる。」

徳と幸福が結びついて真の幸福が約束されるというこの考え、すなわち「徳と幸福の一致」は、18世紀に多くの人が考えた問題であった。ルソーに傾倒していたカント（1724～1804）もそのなかの一人であった。

カントはルソーの『エミール』を初めて手にしたとき、恒例の散歩を中止して読みふけたと言われている。カントのルソーへの熱狂ぶりを示す彼の言葉がある。

「私は、ルソーを言葉の美しさがもはやまったく妨げとならなくなるまで読まなくてはならない。そのとき、はじめて、私は彼を理性をもって調べることができる（カント全集16巻、『美と崇高の感情に関する考察のための覚え書き』）。このようにルソーの思想につよく引きつけられたカントは、ルソーと同様「徳と幸福の一致」について書いている。」

カントは『実践理性批判』のなかでは、人間にとって最高の善といわれるものを、根源的なものと派生的なものに区別しており、前者を「神」、後者を「徳と幸福の一致」とよんでいる。そしてこの「徳と幸福の一致」を『純粹理性批判』の中では「道徳的世界」と言っている。したがってこの二つはおなじことを言っているのである。

おわりに

ルソーが『エミール』を書いた理由のひとつは『告白』（1770年脱稿）によれば、1746年から1755年のあいだに妻テレーズが産んだ5人の子供を次々に養育院に捨てたことへの自責の念からであった。捨てた理由は、貧困であり、さらに次のような理由もあった。

ルソーが他家の女中テレーズを愛人にしたのは1745年で、正式に結婚したのは1768年だった。そして子供が生まれた頃、テレーズは自分の母親や兄たちと一緒に暮らしていた。その家族は性格の悪い人たちで、金銭的にルソーの保護を受けていたテレーズから物を盗んだり、テレーズの名で他人から金を借りることもあった。テレーズはそのことを知りながらルソーには何も話さなかったというくらい、家族の結束は強かったという。それ故ルソーはその家族を信用していなかった。

「私は子供たちを、この育ちの悪い家族にまかせて、いよいよ悪く育てられるのに戦慄した。孤児院の教育のほうが危険性ははるかに少なかった。」とルソーは『告白』の中で述べている。自分のもとで子供たちを育てられなかったルソーは自責の念から逃れられることができなくなって『エミール』を書いたといわれている。しかしルソーはテレーズに子供をつぎつぎと産ませながら、その一方で上流社会の貴婦人たちと恋をしていたのも事実である。当時パリの社交界で華やかに暮らしていた婦人たちは、自分の子供は他人にまかせ、家庭教育などは全く考えていなかった。

16歳の春に家出をしたルソーは3年半にわたってスイス、イタリア、パリを放浪

した後に、最初の保護者になったヴァランス夫人のもとにたどりついた。当時のパリの
上流婦人は社交界の生活を楽しみ、妻として生きるより愛人として生きることを重
んじる自由な女性がルソーのまわりにあふれていた。そしてルソー自身も 21 歳の時、
ヴァランス夫人の愛人の一人になっていた。1735 年、23 歳の夏に彼は病気になる死
を覚悟し、これからは自分を教育しようと決心した。この決心が彼を元気づけて病気
も快復し、同時にヴァランス夫人の庇護からはなれ、自分の力で生活する準備を始め
た。そして 28 歳になってやっと自分だけの力で生活できるようになった。その後、
1750 年、38 歳のときに『学問芸術論』が懸賞論文に当選してルソーは一躍有名になり、
初めて思想家ルソーの誕生となった。ルソーは有名になった後も独学で勉強を続け『人
間不平等起源論』(1755)、『政治経済論』(1755)、『新エロイズ』(1761)、『社会契約論』
(1762)、『エミール』などを次々に出版した。これらのうち『人間不平等起源論』や
『社会契約論』などは 1789 年に起こったフランス革命の思想的背景になったといわれ
ている。

ルソーの生きていた時代、すなわち革命前のフランスの上流階級の婦人たちの生活
は、前に述べたように社交を中心とした快樂的なものであった。

そのような背景があって『エミール』では、家庭の主婦、妻、母の理想像が書かれ
たのである。女性教育の書かれている『エミール』の第 5 編は、『告白』によれば、
パリ郊外モンモランシにあるリュクサンブール公爵の所有する別邸プチ・シャトウで
執筆された。そこは「あらゆる種類の鳥の合奏とオレンジの花の香りとともに私はた
えざる恍惚のうちに『エミール』の第 5 編を書いた・・・そこでテレーズと差し向
かいで飲んだミルクコーヒーがなんとなくまかったことだろう、牡猫と犬がわれわれの
仲間だった。」とルソーは回想している。

参考文献

1. ルソー『エミール』今野一雄訳、岩波文庫、上、中、下。
2. ルソー『人間不平等起源論』本田喜代治訳、岩波文庫。
3. 水田珠枝『女性解放思想の歩み』岩波新書。
4. カッシーラ『ジャン＝ジャック・ルソー問題』生松敬三訳、みすず書房。
5. 桑原武夫編『ルソー』岩波新書。
6. 松田幸子『倫理学研究』夏目書房。